

《今回の優秀作》

「棚田の夕暮れ」

田村加寿子 「かいだん」 58号

「鏡蓋（ガガブタ）」

岡野陽子 「文藝軌道」 7巻・第1号

「三重塔」

崎村 裕 「構想」 48号

「カブトムシが飛んだ」

白川ゆうき 「狐火」 14号

「高齢者劇団二〇〇九年」

重本恵津子 「群青」 76号

《今回の準優秀作》

「遠ざかる明日」

高橋ひとみ 「文藝軌道」 7巻・第1号

「赤い寝巻きの女」

山崎 勉 「塩分」 第51号

「妻と糞虫」

野上 卓 「文藝軌道」 7巻・第1号

「冬ごもり」

吉満昌夫 「埋火」 47号

「我が老残人生」

原石 寛 「文学街」 270号

《読後総評》

読書は追体験といわれるが、このたびこういう機会をいただいで感謝している。たかが同人誌と心のどこかにあった思いは吹き飛んだ。みなどれも（これら以外も）、それぞれ話と表現ともに共感出来、人生それぞれを実感した。

「棚田の夕暮れ」は死んだ息子を山間の棚田のある夕暮れの風景とともに追慕する話。「鏡蓋（ガ

ガブタ）」も、この名前の水草に覆われた沼で死んでしまった幼馴染の少女を思う話で、どちらも「現在」と「過去」をフラッシュさせ構成的にも成功し、何よりも土地それぞれの風俗・自然が固有名詞とともに出て、新鮮だった。

「三重塔」と「赤い寝巻きの女」はともに戦後直

後の話で、その時代風景・生活が生きている（こ

れを書けるのはこの世代ならではの？）。前者のタ

イトルは登場人物が遺した画からきているが、戦

争で記憶喪失になり家族からも見放された「もみ

りようじ（あんま）」を業とする男が描かれるが、

その身の上以上に、彼をあたたく見守る人たちの

善意が印象に残った。後者は、結核療養所にお

ける人間模様を描くが、通常の病床ものところが

て、生（性）への確執を描いて、異色だった。

「カブトムシが飛んだ」は離婚の危機にあった夫

婦が子供たちを連れて遊園地へ行く話。「蓼食う

虫」の小品版ともいえるが、ほんの少しの行為で、

夫婦の心が微妙に動く。爽やかな感動、の佳品。

「高齢者劇団二〇〇九年」「我が老残人生」はとも

に、老境（83歳と90歳）を描いているが、前者

はそれを感じさせない文体と内容であり、途中で

筆者の年齢が明かされ、以下の筋につながって

くなど、読むおもしろさ、意外性を感じさせる。

この世代（彼女）の精神生活の豊かさを知る。後

者は卒寿なら、ふつう「書く」どころではないの

に、自らを対象化、生きる秘密が明かされる。

「遠ざかる明日」は介護の現場、そこに勤めるへ

ルバーたちの人間模様が描かれる。「妻と糞虫」

は、定年した夫の何もやることのない日々を描く

が、その反映？として妻が「糞虫」になってしま

う話。戯画化したタツチだが、笑えない人生・世相である。「冬ごもり」は、戯画化もなくストリートに老残の人生を描いた。

《優秀作・個別評》

●「棚田の夕暮れ」

「かいだん」 58号

いとしい息子への哀切な挽歌。棚田のある山間

の農家、その二番目に生まれた哲也は利発な子で、

学業はもちろん手先も器用。あるとき爪楊枝で五

重塔を作ったコンクールで一等賞になった。長男

も大学に出したが、この子はそれ以上になると

思わせた。だが近所でも評判のわが子があるとき

を境に成績が落ちてきた。これではいけない、息

子をわざわざ東京に住ませ、一流高校を目指さ

せた。ある日様子を見に行った母は、部屋で髪を

切って勉強に身が入っていない我が子を見えしま

う。そしてついに聞きたくなかったことが口をつ

いて出る。「高校行くのをやめたい」。哲也はそのとき

から鬱病にかかっていた。

わが子に期待をかけるのはどこも同じだろうが、

母には若い頃の苦い記憶があった。地元の高校を

卒業、東京の銀行勤めをしてそこで知り合った男

と交際していたが、直前にふられたのだ。「付き

合いと結婚は別」、男はそう言って副頭取の娘婚

になった。結局土地の朴訥な今の夫と結婚したが、

彼女には、上昇志向が残った。故郷に帰った息子

子との思い出がつづく。ぜんまい・こごみ・山う

ど・木の芽にとりのあし、など恵みにあふれた山

に早春、露の臺をとりに行った。そのとき枯れ木

の中に彼岸桜が咲いていて、哲也が花の名を聞い

た。夕暮れの棚田、母は自分のことで犠牲にさせてしまったわが子を追憶する。

●「鏡蓋（ガガブタ）」 岡野陽子

「文藝軌道」7巻・第1号
表題の「鏡蓋」は別名「ガガブタ」ともいい、沼の水面を覆っている水草。ハート型の葉と白い小花をつける。「ガガ」は「鏡」の訛りであり、葉のかたちが和鏡に似ていることから付けられたという。沼は10メートル四方であるが、「僕」の幼馴染みの鴨村泉美はその沼で亡くなった。

そういう語りで始まる思い出話だが、哀切な読後感がある。医院だった僕の家の裏手にある桃畑、それを営んでいたのが泉美の家だった。沼は「底なし沼」と呼ばれていたが、その沼の脇の小さな神社で、僕はボール投げをしたり遊んでいた。当然学校では噂になってからかわれた。神社の本殿の下に本を隠し、その交換をした。返却された本の中に、泉美の書置きがあるのが楽しみだった。

中学になったある日、泉美の家が引越すということを母から聞いた。何でも父親の浮気が原因で、母親は桃畑を売って泉美の養育費を作ったという。だが、その日午後の課業が終了しても、泉美の行方はわからなかった。

●「三重塔」

「構想」48号

崎村 裕

戦争で頭に怪我をして記憶喪失になった水間哲雄はあんまをしているが、寺の門前で居眠りなどしている。「もみりようじ」と餓鬼どもにからかわれ石を投げられたりする。もともと旧家の息子だが、長療養していた父が亡くなっても、跡取りはその下の息子がなった。そんなもみさん、

のけがの手当てをしたり、裏手の狭い部屋に出入りし本を読ませてもらっていたのが、当時新制中学に入ったばかりの「私」だった。もみさんは本だけでなく、旧制高校時代は絵も描いていたようだった。水間家を取り壊されて工場になった後、土蔵の二階に住んでいたが、ある日階段を踏み外し、亡くなってしまふ。残された絵のうち、「三重塔」を描いたものは、戦没画学生の絵を集めた信州の「我聞館」（実在）という美術館にひきとってもらった。ものがない戦後の人情と精神生活を描いて、ふっとした気持ちになる。

●「カフトムシが飛んだ」 白川ゆうき

「狐火」14号

離婚を決意した夫婦が最後の思い出作りとして、5歳と4歳の子どもを連れて遊園地に遊ぶ話。深刻な事態であるが、やわらかな筆致でそこにいたる経緯、遊園地での出来事、妻の心のうちなどが描かれる。夫が子供たちへの最後のプレゼントとして買ったビニール製のカフトムシが風でとんで車両と車両の間に落ちてしまふ。父親は危険を冒してそれを見つけ出す。そのことが夫の分かれることしか道がないと思っていた気持ちを突き破り、離婚の危機を脱したようである。丁寧で無理のない筆運びで進んでいく話は、強烈ではないが、読後心に残る。

●「高齢者劇団二〇〇九年」 重本恵津子

「群青」76号

高齢者劇団の稽古や本番の顛末を書いている。蜷川幸雄が舞台監督というのも豪華だが、それ以外にも実際の有名人が実名で出てくる。蜷川の指

導の厳しさは知られているが、若い人向けで老人には丁寧で、役充ても稽古もその場でその場で切り上げていく演出も目に見るよう描かれる。

最初、タイトルからも読む気を誘われなかったが、この創作？（記録風だが創作になるう）に気持ち奪われるのは、後半作者自身のこと而言及されてからだ。実は作者は今年83歳、最高齢の劇団員だったが、舞台の進行中に思わぬ事態が起ってきた。テレビに出ることになったのだ。日本

テレビの番組に自分が主人公となったドキュメンタリーが撮られることになった。題して、「蜷川演劇に挑む女八十三歳」。この日程や彼女の過去の人生がたいへんおもしろい。若い頃、北九州戸畑の「青春座」において、石坂洋次郎の「若い女」の主役に抜擢されていまもあるその座や、母校の小学校に訪れた話、幼い頃は「キング」などの雑誌を読んで江戸川乱歩などの探偵小説に見入り、ある日、「罪と罰」を図書館で見つけ、それらしい雰囲気から読み始め、そうではないとわかってから逆にロシア文学に開眼、後に早大露文科に行ったことなど、この世代の精神遍歴が髣髴される（番組の試写会に招かれて、「生まれて初めて自分の姿をスクリーンで見た」感動も初々しい）。DVDももらったが、お笑いなど安手の番組作りになっている今日のテレビ界の批判もあって、人生の先輩の声（描写）は洗刺である。

《準優秀作・個別評》

遠ざかる明日

高橋ひとみ

「文藝軌道」7巻・第1号
老人介護の会社の人間模様を描いた作品。大学の福祉学科を出た主人公は専攻が生かせるこの勤

務場所を選んだが、職場の人間関係がうとましい。学歴のない上司からはいろいろいわれるし（自分よりもっと冷遇された人もいた）、あまりにも安い報酬に子を抱えた妻からは毎月不満を聞かされる。大学時代の親友は転職してIT関係の会社でやっている。ある日、その彼と飲んだとき、彼と妻が会っていた事実が話に出て、立場の弱い主人公はいらだつて妻にぶちあたる。それでも「大好きなお年寄り」のために今日もがんばるのだが、ある日お年寄りの姿が薄らいで、紙切れが舞ってきた。一万円札だった。

平易な描写で淡々と展開する中、最後の幻覚などは、福祉とそれにかかわる現実を強烈に訴える。

赤い寝巻きの女 山崎 勉

「塩分」51号

終戦から間もない頃の結核の隔離病棟での男女の患者同士の話だが、実社会での生活をそのまま（私生活とともに）描いたもので、カネや男女のこと、病氣や将来に対する不安など、なまなましいほどに語られる。主人公の女性は肺葉切除の手術のあと死んでしまう結末だが、悲劇というよりも、一時代の縮図・人間劇と読める（「どん底」みたい）。

妻と蓑虫 野上 卓

「文藝軌道」7巻・第1号

結婚して三十年、定年を迎える夫婦を描く。前半夫の職場のことが描かれる。二流大学を出て、一流企業の窓際、庶務課長代理でおわる自分、自分より下で出世した後輩、逆に転職をよぎなくされたものなど、会社社会が描かれる。定年、しても60歳過ぎて手に職なしでは再雇用もない。趣味

もない。家庭での妻との心の確執も始まる。「わたしね、蓑虫になる」、妻が急に言う。ある日家へ帰ると中は一面枯葉だらけ。布団にいたのは蓑虫になった妻だった。いいようのない事態におおるするが、そのうち羽化して飛び去ってくれればいい、と思いつくが、「オオミノガ」で蓑虫になるのはオスだけとわかって、ますますおろおろする夫であった。カフカ「変身」の女房版。

冬ごもり

吉満昌夫

「埋火」47号

戦後、重化学工業の現場を担ってきた人たちの「現在」を描く。70代の主人公はいま病院のベッドに仰臥。そこを訪れるかつての同僚。もう一人の仲間だった同僚の訃報を伝える。

おもに「病床」の現在が描かれ、ベッドのそれぞれに孫たちのかわいらしさ。そしてクレーンを扱っていた「工場」の過去も語られる。

ただ、紋切型を抜けきれないのは、昔はよかった、今は予想しない方向にこの社会が行って、いま老境にあるという境遇の話し方だろう。もっと、過去の話を詳細に語ればおもしろいものになった。ちなみに、筆者はこの「埋火」という同人誌を一人で主宰し、投稿の数作品も全部一人である。長く続いてこの世代の意気を感じる。

我が老残人生 原石 寛

「文学街」270号

卒寿を迎えた筆者の日常を描く。妻も亡くなって、誰が訪れるということもなく起伏もない寥々とした日々が綴られるが、後半文体も上がって(元

気になって)いくのは、この「私」を支えるものが言いたい添えられるからだ。すなわち、文章を書くこと、小説を書いて発表することだ。だが年金に頼る貧しい老境、ほんとに簡単な小部数の創作集(全集)だが、それでも6巻目になった人間の執念というか、生きる核・意味が書かれていてよかった。

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

心に残る本を

小説、エッセイ、評論 200P

500部 80万円上製本(ハードカバー)
65万円並製

詩集 100P 50万円 ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで